



新九郎迎集

(株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

記録的な猛暑も落ち着き、朝晩はしのぎやすくなってきました。家の周りの稲穂もたわわに実り、夜には虫の音が聞こえます。

第9回小田原映画祭は、22日小田原城銅門上映で幕を開けます。話題の「太秦ライムライト」には、主演の福本清三氏がゲストで来られます。

九月の新九郎は、小田原ビエンナーレ第2弾「現代美術展」で幕開け、伝統あるグループ展が続きます。芸術の秋の始まりです。皆様のご来場をお待ちしています。



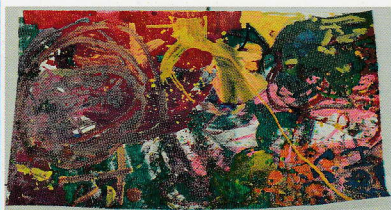
新九郎 9月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会 期 展覧会名	見どころ
	9/2(水)～9/7(月) 現代美術展小田原ビエンナーレ2015「感性の磁場」	加藤富也、高橋幸郎、柳川貴司、村上健太【展示作家の作品説明】9/5(土)15:00～
	9/9(水)～9/14(月) 第29回小田原女流展	西湘画壇で活躍する女流画家たち、油彩・水彩画(抽象・具象)約25点
	9/16(水)～9/21(月) 第63回水曜会洋画展	18名の会員による油彩画 約40点。抽象・具象(風景、静物)
	9/18(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ
	9/23(水)～9/28(月) 第二金土デッサン会	絵画の基礎と言われる人物デッサンを勉強している会。講師は無く、各自、自由に描いています。

会期・展覧会名	会 場
9/11(金)～9/13(日) 清水新也油絵展	アオキ画廊 2F 0465-23-5624
9/16(水)～9/21(月) 野口均作陶展	飛鳥画廊 0465-24-2411
9/24(木)～9/27(日) 第15回 秀月今昔書展	飛鳥画廊 0465-24-2411
9/16(水)～9/21(月) 勝山治実展－ウメ子7－	お堀端画廊 0465-23-7819
9/13(日)～9/20(日) 大人たちの図画工作展	ぎやらりーぜん 0463-83-4031
9/23(水)～9/28(月) 湘南の工芸仲間展	ぎやらりーぜん 0463-83-4031
9/22(火)～9/27(日) 松本正二郎個展	丹沢美術館 0463-83-9550
9/1(火)～9/5(土) 小田原ビエンナーレ：曾根光子	なりわい館交流館 0465-20-0515
9/9(水)～9/14(月) 小田原ビエンナーレ：石原瑞穂	回廊「瞬」 0465-42-5576
9/9水～14月小田原ビエンナーレ 梅原美喜子、松浦延年、山口俊朗	巨櫛の居 0465-49-6077

アール・ド・ヴィーヴルの作家たち ～自分らしく生きる～ 1. 合同作品



アール・ド・ヴィーヴルは、知的障がいのある子どもから大人までを対象に、アートを中心としたワークショップを提供するNPO法人です。

アール・ド・ヴィーヴルとはフランス語で、自分らしく生きること。障がいがあっても自分らしく生きられる暮らしを追求することをコンセプトに、表現活動を様々な方法で発信しています。

毎年ギャラリー新九郎にて展覧会を開催、多くのお客様にご来場を頂いております。会期中には作者たちを招いたギャラリートークがあり、作品に込められた思いを言葉や身体を使って紹介します。その言葉をしっかり聴こうとする来場者の皆さんと作者たちとの温かなコミュニケーションが、彼らにとって心地よい時間となります。

<http://art-de-vivre123.blogspot.jp>

NPO法人アール・ド・ヴィーヴル 萩原美由紀

思うことなど 横井山 泰



伊勢物語の絵を描いています。二年間かけて125段を完成させる予定です。なかなか長大な計画です。絵も文章もスルスと始まるとスラスラと続きます。でも、そのタイミングに言い訳していると時間ばかりが過ぎて行きます。実際に観えたものしか描けないので、やっぱり自分の都合を挟まずにやれば良い。という事なのでしょう。とはいえ伊勢物語はなかなか始められませんでした。百人一首を描いた時は「歌人が現代人と同じようなことでクヨクヨしたり歓喜したりする様子が観えて、彼らが他人でない気がして」から描けるようになりました。伊勢物語の主人公である在原業平は百人一首でも描きましたが、伊勢物語の世界は、なかなか近づいてきませんでした。「やらなくては」という気持ちは時間とともにシコリのように成長して、気分はすぐれません。何が描けないのか？という初段で美人姉妹を覗き見る場面をどう描いたらいいのか観えなかったのです。そこで、とにかく作品を観に行きました。面白いもので探し物は求めているものと違う物が見つかります。三菱一号館で暁斎を観た時(動物を描いたコーナー)文章を読む様に絵が観えたのです。アトリエには地塗りのキャンパスが積み上げて置いてあり、その一角に無言のプレッシャーを感じます。ドローイングを重ねてもなかなか入れません。怖いのです。暑さがひと段落した頃、垣間見がはじまりました。ものがたりは誰の目線なのだろう？と我は入れずにスタートしました。

●9月19日まで銀座の gallery151A「えんぎもの」というグループ展に小さな鳥の絵を出品しています。●9月12日堂田のアトリエでホフディランのワタナベイビーさんライブ(19:00～¥3,500)があります。野依幸治さん、植松知祐さん、渡辺有葵さんの小品も展示します。作品はその後、東名富士クリニックに冬まで展示されます。

大地の芸術祭「越後妻有アートトリエンナーレ 2015」

豪雪地越後妻有(新潟県十日町市・津南町)を舞台に、過疎高齢化が進む中、「爺様婆様の笑顔が見たい」と地域の元気を取り戻す取り組みとして 2000 年から始まった「大地の芸術祭」は、今年 6 回目を迎えた。今年の作品は恒久作品 200 点を含む約 380 作品。参加アーティストは、35 の国と地域から約 350 組(うち新規 17 の国と地域、180 組が新規)が参加するという大規模なものに進化していた。アートを道しるべに里山をめぐる旅は、年々参加者も増え、今年の夏も、東京 23 区の 1.2 倍の会場に 43 万人がやって来たというのだから、定着したアートイベントになっていた。

私は 2 回目の参加だ。2009 年第 3 回の時、娘婿の友人や恩師が参加しているというので、気軽に見に行ったら感動の連続だった。一番心に残った作品は冬の間に地域の人と一緒に作った花 15000 本をブナの原生林に飾った作品だ。車で山また山を抜け、山の中に入って出会った自然と同化した作品のインパクトは、今も忘れていない。婿の恩師を訪ねて行った鉢地区の公民館では、作家の為に連日地域の方が食事の世話をし、夜はお酒も入って毎晩楽しい語らいの場になっていた。普段静かな村がこの時期活気づくことを大変に喜んでいられた。私たちまですっかり御馳走になり、それ以来妻有は大変近しい場所になった。

● パフォーミング・アートイベント「鬼太鼓座」



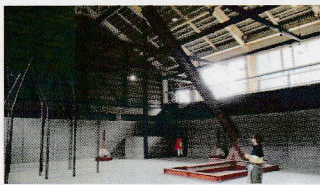
今年は息子が所属する鬼太鼓座がパフォーミング・アートイベント『大地の盆』に出演するためそれに合わせ出かけた。座長と総合プロデューサーの北川フラム氏が友人という事もあり、鬼太鼓座は 1 回目からずっと参加する妻有の顔だった。

松代農舞台は、ほくほく線松代駅の裏、草間弥生「花咲ける妻有」が目印だ。イリヤ&エミリアの「棚田」を借景にした松代農舞台では、13、14 日の夕方からイベントがあった。京極夏彦の新作「鬼談」を本人の朗読と勘繰による文楽人形・鬼太鼓座による音楽のコラボなど、普段触れることの少ないパフォーミング・アートの世界を堪能した。鬼太鼓座の空気を通して伝わる力強い鼓動に浸った演奏。息子の勇士にも心を打たれた。

● 里山アートめぐり

妻有ではナビが大活躍した。のぼり、作品の場所を示す看板など親切な案内を頼りに行けば心配はない。至るところで美しい景色と作品に触れ合える。ただトンネルの多い山道は、暗くなってからはちょっと用心がいる。リピーターの強みで今回は自由に見たいところに行くことが出来た。温泉に入ったり、酒蔵を訪ねたり、道の駅で舌鼓を打ったりとゆったり回ったが、気づくとスタンプ帖には 65 のスタンプ、3 日間で 89 作品を楽しむことが出来た。今年のテーマは『人間が自然・文明と関わる術こそが「美術」』『都市と地域の交換』だ。今回印象に残った作品の一部をご紹介します。

中里エリアの清津倉庫美術館は廃校の体育館の大空間を生かし、保管庫とギャラリーを兼ねた倉庫美術館が生まれていた。開館記念展の日本を代表する戸谷成雄、原口典之、遠藤利克、青木野枝の 4 人展は、広いスペースに負けないどれもダイナミックな作品群で、大型作品を大空間でみられる斬新な美術館は見ごたえがあった。



川俣正は、同じ体育館(松代生涯学習センター)を使って、妻有の地形をそのままジオラマにしたダイナミックな作品を作っていた。体育館一杯にベニヤを重ねたジオラマを俯瞰すると、妻有全体を把握でき、地区ごとに置かれた作品を見るとどこにどんな作品があるのかわかるインフォメーション的役割もしてくれていて、歩きながら全容を体感できるジオラマには感動した。これは、川俣氏が 15 年間関わってきた芸術祭のアーカイブだった。



足柄アートフェスティバルでキュレーターをされた大巻伸嗣さんの、廃屋を使った『影向の家』は、若者で賑わっていた。家全体が装置のようになった作品だ。光を遮断した真っ暗な建物に入り暗闇に慣れたころ、2階に上がると下から煙の玉が上って弾ける。シャボン玉だ。まるでお盆に帰ってきた亡き人の魂に出会えたような新しい体験だった。

イ・ブルのドクターズハウスは、松代の蒲生地区の人たちが通院していた 3 代続いた旧室岡医院を使っていた。居間の黒光りする床に空けた穴を覗くと、鏡によって永遠まで続いているような時空に引き込まれる。3 年前、韓国から下見に来たイ・ブルさんはすぐこの建物が気に入り、自分の作品を作ると決めたという。そのインスピレーションがそのまま形になった素晴らしい感性の作品だ。

田島征三「絵本と木の実の美術館」は、丸ごと絵本という感じで、そのパワーは健在だった。9 年前に尋ねたときはこじんまりしていたが、この 9 年間コツコツと作り続けていたのだなあとその仕事にも敬服した。体育館に展示されている流木のカラフルで自由にダイナミックな作品に迎えられて教室を巡ると、本当にやさしい人なのだと伝わってきた。愛にあふれる作品に嬉しくなってしまった。



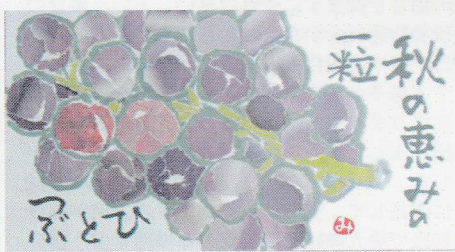
十日町キナーレは越後妻有里山現代美術館となっており、前回よりクオリティの高い作品がたくさん展示されていた。回廊の中央の池には、緑豊かな見事な山が出現していた。蔡國強の「蓬莱山」だ。周りの回廊には、地元の匠に習い地域の子どもたちと共に作った 1000 体の藁のオブジェが山を囲んでいた。山には、滝や霧がかかり、わら細工はめでたい鳥や龍かと思いきや、よく見ると、船やヘリコプター、潜水艦や軍艦だ。終戦 70 年の夏、東アジアが緊張状態にある中であえてテーマを「島」にしたリアルなものだった。

圏央道で、3 時間。新潟はさらに身近な場所になった。棚田の稲穂は色づいただろうか。栢山の田を見ると思い出す。「大地の芸術祭」は、9 月 13 日まで開催している。 新九郎友の会 木下和子



絵てがみ折々 ―小田原の暮らしの中で―

野地 三恵



歳時記カレンダーをこの 10 年来愛用している。

「二十四節気」「七十二候」や、

四季折々の花や鳥、菓子の絵、月の満ち引きなども入っていて、いつ見ても楽しい気分になる。

「二十四節気」は、一年を季節の推移を表す二十四の節気に分けたもので、さらにそれぞれの 15 日間を三等分した「七十二候」は、ほぼ 5 日間でその時期の自然現象を当てはめてある。

このカレンダーを見ていると、「秋」ひとつとっても、初秋から晩秋まで、同じ気候の日というものはないのだと知らされる。間もなく「白露」。葡萄のおいしいときだ。家の冷蔵庫に冷やしたのがあると思うだけで、帰宅の足取りまで軽くなるようだ。

8 月のこと

「生誕 100 年 安藤軍治 画業特別展」は大盛況であった。用意した資料 450 部がほぼ無くなるほどだった。

主催の「安藤軍治画伯を偲ぶ会」の剣持雅彦さん、斎藤良夫さん。軍治氏長男の安藤直人さん。三人の展覧会に寄せる熱い思いが伝わったのだろう。親類、地元国府津の方々が多かった。安藤画伯は生家こそ国府津だが、東京美術学校入学後は東京暮らしであり、時々帰省することもあったようだが、国府津在住ではない。にもかかわらずこれだけの人が集まるというのは、作品の力はもちろん、人間的な魅力によるところが多いのだろう。若い頃、肖像画を描いてもらったという、遠縁に当たる方は、遊びに行った折り、「おいちょっと、そこへ座れ」と言われ、2 時間程で油彩画を描き上げたのだという。軍治氏の気さくな人柄を伺わせるエピソードだ。

安藤軍治作品を初めて見る人は、小田原にこのような優れた画家がいたことに、一様に驚く。日展特選 2 回、一水会会員という正統派で、はつらつとした若い女性を魅力的に表現している。明るく誰にも愛される、昭和という良き時代を感じさせる絵である。偲ぶ会の方は、「この展覧会は始まりです。これから色々な企画で安藤軍治画伯の画業を市民の皆さんに伝えていきたいと思います。」と語る。郷土ゆかりの美術作品として、大切に残していきたいものである。㊦

